

AI人材／技術者が集まる地域と領域の調査 (1/2)

世界的に同じ動向と言えるが、AI技術者の獲得競争は一層激しさを増している。今後5～10年で、大手企業による人工知能の研究開発はより一層広く深くなるであろう。しかし現在の中国ではAIにおいて主要な研究者は殆ど存在していない。

機械学習の分野において現在比較的良好に使われているオープンソースのライブラリ（TensorFlow、Torchnet、Caffe、DMTK、SystemML など）はほとんどが米国をはじめとする企業・機関によって独占的に開発されており、中国初のもの存在しない。加えて、機械学習の基礎技術、実現原理及び応用の方法に関して、中国では十分に重視されておらず、応用重視の研究をしている結果、AIに関する基礎技術が不足し、真に革新的な研究は未だできていない。

実際にGoogle Brain、Facebook AI Research、OpenAIをはじめとする世界トップクラスのAI研究所はそろってアメリカに集中している。また、研究所のみならずトップ研究者の数でもアメリカが大きく引き離すほか、世界トップのAI学術団体とよばれるアメリカ人工知能学会でのプレゼン数でもアメリカが大差でリードしているのが現状である。すなわち中国が顧客サービスに直結する応用分野での研究に注力してきたのに対し、プラットフォームとしての地位確立を目指し基礎・技術層に力を注いできたアメリカは基礎研究では圧倒的に有利と見受けられる。

中国における代表的な企業でいえばface++と格霊深瞳（DeepGlint）の2社があげられる。彼らは画像処理において、優秀な開発人材を集めることによって、短期間のうちに急速に頭角を現すことに成功した。

AI人材／技術者が集まる地域と領域の調査 (2/2)

地理的な側面でいうと、北京、上海、広東は中心的な医療AIの発展地域で、これらの地域には有名なインターネット企業及び技術企業、ハイエンドな科学技術人材が集結している。他にも重慶や貴州はビッグデータ産業圏として関連企業や人材誘致を幅広く行っている。経済的には、これらの地域は比較的遅れをとっていたが政策と規制緩和で盛り返しを図ろうとしている。

北京・天津・河北は、北京特に中関村の情報産業の優位性を背景に、大量のビッグデータ企業が誕生した。現在中国でビッグデータ企業が最も多く集まっている地域である。しかし北京は少し飽和状態にあり、一部のデータ企業は天津や河北などへと拡散していった。

深センと広州は電子情報産業で優位性を持つ。加えて国家スパコンセンターがこの地域にあることが、人材と企業の集約を後押ししている。その他テンセントやファーウェイ、中興などの基幹企業の波及効果により、珠江地域（広州市）は、ビッグデータの発展を成し遂げた。

上海、杭州、南京はビッグデータとスマートシティ、クラウドコンピューティングの発展が密接に組み合わさり、大きく発展した。上海に至っては「上海ビッグデータ三年行動計画」を発表しており、都市管理の面で技術拡大を推進している。

最後に、貴州と重慶(大西南地域)は積極的に国内外の大手企業を誘致することで、AI産業の急速な発展を実現した。